

〔原 著〕

身体イメージ，相互行為，ソーシャルメディア

大畑 裕嗣¹

要 約

本稿の目的は、ソーシャルメディア上のイメージ（画像）、特に身体イメージに焦点を当てて相互行為と主体の関係を再考することにある。相互行為における言語的なものと身体的なものの矛盾を起点として、ソーシャルメディアを介しての「相互」行為においては身体的なものが身体イメージによって代替されることを指摘し、その意味を検討する。ソーシャルメディアは、そこにおける言語的なものと身体イメージの距離を自明化するために、「語る」主体と「現前する」主体をつくりだす。さらに相互行為を「公共圏の論理」と「非—公共圏の文脈」と呼びうる異なった局面に位置づける。伝統的な「相互行為」概念では、ソーシャルメディアを介しての「相互」行為を十分に解明することはできない。なぜなら、ソーシャルメディアを介しての「相互」行為は、伝統的概念が有する諸前提によくあてはまらないからである。したがって、高度情報社会に直面するうえで、相互行為理論の革新は不可避の課題となる。

キーワード：身体イメージ，相互行為，ソーシャルメディア

1 はじめに

社会学の学的アイデンティティは、（一般の社会人の感覚からすると）生硬で耳慣れない、もっとはっきり書けば不格好な「専門用語」からなる概念装置を駆使して、自明視されている「社会的現実」を自明でないものとし、社会的現実における「世間の常識」とは異なる関係性を見いだすという、いわゆる「常識破壊ゲーム」（近森 2011: 430）を遂行するところにあった。今でも、ある程度、社会学に対するそういう期待は残っている

だろう。

ただ、このような「常識破壊ゲーム」としての社会学は、以前（ここで言う「以前」とは、卑近な話で恐縮だが、いちおう、筆者が学部学生、大学院生として社会学を学んでいた1970年代後半から1980年代前半ということにさせて頂きたい）ほど、人びとをひきつけるものではなくなっているように見える。その理由はさまざまであろうが、ひとつには、次のようなことが考えられるのではないか。「常識破壊」装置としての社会学の基本

1 明治大学文学部心理社会学科 教授

概念は、それ自体、「自明とみなされる」諸前提に立脚して構築されているが、現代社会の変化は、社会学の基本概念が前提とする「自明性」をふたしかなものとしつつあり、人びとはそのことにそれとなく気づいているのではないかということだ。いささか乱暴な書き方になってしまうかもしれないが、「世間の常識」を「破壊」することで自らの存在意義を主張してきた社会学の側の「常識」が、変化する社会の側からの復讐にあっており、「破壊」を運命づけられているのではないかということである。

日本社会においては1990年代以降、本格化した高度情報化の問題は、現代社会学のそのような運命を暗示する典型ではなからうか。高度情報化によって社会学の基本概念群は再審を要請されているようにみえる。ただ、ここで言う「再審」とは、高度情報化という現象が社会学の基本概念が想定していたのとは、まったく次元が違うような問題状況をもたらし、それによって従来の概念の無効化が宣告されているというよりも、高度情報化という再帰的な現象が、社会学の基本概念にもともと内在していたが、目立つものではなかった亀裂を顕在化させているというほうに近いのではないかとすれば、高度情報化は、前世紀末以来、迷走、分裂状態に陥っているようにもみえる社会理論の再編のための踏み板となる肯定的な可能性を持っているかもしれない。本稿は、このような問題意識のもとに、ソーシャルメディアにおける身体イメージとテキスト（書きことば）の関係に注目することで、社会学が自明視してきた「相互行為」の概念を見なおすことを目的とする。

社会学においては「相互行為」「相互作用」「社会的相互行為」などのタームはほぼ互換的に用いられ、「社会的な場で複数の主体が影響をおよぼ

し合い、それによって互いの関係を変容させていく過程」（宮島編 2003: 419）というように定義される。具体例を挙げて記述するなら「レストランでたべながら話をしている二人の友人は、相互作用を行っている。（中略）おたがいに目を交わす、言い争う、手紙を出し合う、これらはすべて相互作用である」（岩井 1972: 55）ということになる。

ここで問題になるのは、前出の定義における「社会的な場」というのをどうとるかということである。岩井弘融が挙げている「手紙を出し合う」ことが（社会的）相互作用（相互行為）の一例になるとするならば、本稿が扱うTwitterやFacebookなどを介してのメッセージのやり取りも、同様に「社会的相互行為」ということになるだろう。これは「手紙を出し合う」場合も、「ソーシャルメディアでメッセージをやりとりする」場合も同様ののだが、これらの例において、相互行為が行われる「社会的な場」というのが、「それを行う<主体>が共有する物理的空間」ではないことは明らかである。とすれば、社会的相互行為が行われる「社会的な場」とは、行為の成立を可能にする「メディア」と言いかえることもできる。この点は多言を要しまい。

ただ、ソーシャルメディアを介しての相互行為を分析対象とすることは、それが行われる「社会的な場」の性格について考えなおすことにとどまらず、主体と行為の関係の問いなおしをも要請するものとなる。前出の定義の記述だと、相互行為を行う主体は、あたかも行為に先行して存在しているかのように思われるが、ソーシャルメディアを介しての相互行為においては、主体は基本的に行為を介して生成する。

本稿は、ソーシャルメディア上のイメージ（画像）、特に身体イメージ（2節）を契機として、相互行為と主体の関係を再考する。相互行為にお

ける言語的なものと身体的なもののあいだの矛盾に着目（3節）した後、ソーシャルメディアを介した「相互」行為においては、身体的なものが身体イメージによって代替されることを確認したうえで、その意味を考察する（4節）。ソーシャルメディアにおける言語的なものと身体イメージのあいだには距離が存在するが、通常、それはソーシャルメディアの利用者たちには意識されない。そのような自明化のメカニズムを、ソーシャルメディアにおけるテキスト（書きことば）において「語る」主体と、身体イメージ（画像）として「現前する」（画面に現れる）主体の関係において考察する（5節）。さらに、ソーシャルメディアの性格は、そこで行われる「相互」行為を、ある行為を発する身体と、それが直接的に向けられた「仮想的」な受け手という範囲に限定するものとどめず、それによって「相互」行為は、「公共圏の論理」と「非一公共圏の文脈」という異なった局面に位置づけられることを述べる（6節）。最後に以上の論議を要約して、伝統的な「相互行為」概念では、ソーシャルメディアを介しての「相互」行為をなせうまくとらえることができないかと、そこから生じる理論的含意を示す（7節）。

2 写真／身体写真

光化学反応を利用して作られた半永久的な画像という写真の技術的定義は、ソーシャルメディア上の写真についても妥当するだろう。また、ヴァルター・ベンヤミン（1931=1995: 570）による、大衆がそれを所有することを求める、一時性と反復可能性をともに持つ模倣という把握も、それは複製技術によって大量に出現することで、「それぞれの状況のなかにいる受け手のほうへ近づいてゆく可能性」（Benjamin 1936=1995: 590）を持

つという指摘も、ある意味、印画紙にプリントされた「伝統的」な写真以上に、電子化された写真によりよくあてはまる。私たちは、スマホで写真を撮り、それを保存し、端末の画面で友だちに見せ、見終わったらそれを「閉じる」。「閉じられた」写真は「消える」。つまり、それは「一時的」である。ただ、私たちは、それが「消えて」しまうことと、「なくなって」しまうこと、「消去」されてしまうことは別のことであると知っている。また見たくなったら、また加工したり、送付したりするために必要になったら、アプリでそれを探して「開き」なおせばよい。それは「反復可能」な画像でもある。また、後で検討するように、そのように撮られた写真は、インターネットを介して「それぞれの状況のなかにいる受け手」（モバイル端末をいじっている「受け手」は、たとえば映画館の中に座ってスクリーンを見つめている観衆と似たような、一定に「類型化」しうる状況のなかにいるわけではない。かれらがスマホをいじっている状況はまさに、ベンヤミンが当時の「複製技術」に関して考えていた以上に「さまざま」だろう。）に送られる。ネットはたしかにベンヤミンが言う「複製技術」としての性格を持つ。しかし、ソーシャルメディア上で写真は、ベンヤミンが考えていたのとは、違った使われ方をし、違った力も持っているようだ。このエッセイは、そのことについて考える。

写真の中で、（人間の）身体写真、特に自らの身体を撮影した「自撮り」写真は、特権的な位置を有するのか。身体写真一般が、写真の中で占める特権的な位置は、写真の社会史からも明らかだ。西欧近代において写真術に飛びついた市民にとっては、中世においては特権階級しか残しえなかった自らや自らの家族の肖像画に変わり、自らの家

族の写真を撮ってもらえることが上昇欲求と承認欲求を満たす源泉となった。身体は写真に写されることによりまず「撮られる」価値があるものとなり、加えて（伝統的には）画像というかたちで「残される」価値があるものとなった。スマホで撮った身体写真はワンタッチで消去されてしまうがために「残される価値」はゆらいでいる。しかし、写真に撮られた身体は撮られなかった身体とは異なり、「撮られるに価する何らかの価値がある」ことを写真の存在自体が論証していることには変わりがない。ただ、撮られた身体が撮られた他のモノ、たとえば、山や海やラーメンに比べて「特権的」な存在であるかどうかは、この点からはわからない。

自撮り写真は、20世紀写真史の中でたとえば晩年のアンディー・ウォーホルによるセルフポートレートを試みにさかのぼることができる。倉石信乃（2004: 121）によれば、ウォーホルのセルフポートレートは、近代絵画における自画像が描かれた自己の「内面」の外化」を要件としていたのに対し「徹底して内面のない作者性の表象として反復している」と言う。倉石（2004: 122）によれば、今日のセルフポートレートの理念には、写真を撮る者（写真家）と撮られる者（被写体）という非対称的な権力関係への批判がこめられ、当の作品の「政治的な正しさ」は、「写真の被写体である作者という存在」が「加工しやすい素材＝物質のひとつに拡散していくこと」によって裏づけられているとする。ただ、今日、普通の人々によって大量に撮られ、インターネットを介して、流通、拡散している「自撮り写真の論理」を、このような、芸術的な「セルフポートレートの理念」にどれほど引きつけて解釈しうるかはきわめて疑わしい。

ヴィクター・バーギンは、写真と意味の関係を

探究した論文の書き出しで「写真は（中略）「純然たる視覚」メディアではない」（Burgin 1983=1994: 75）と述べている。それは、写真には何らかのキャプション（書きことば）が添えられていることが多いということにのみよるのではない。バーギンは、何の説明もなしに展示されているような芸術写真さえ「言語によって侵犯される」（Burgin 1983=1994: 75）とする。写真を通じて「意味を見ること」に関するバーギンの論議は錯綜している。しかし、バーギンの主張の焦点は「写真の一般的な社会的効果」に関する次のような一節にかなり明確に示されているのではあるまいか。「社会秩序は、ある意味で、様々な程度に公式的に組織化された言語的言説のブロックによって組み立てられている。写真の重要な社会的効果は、そのような言説の構成の中において、他の言説と重なりあうことで生みだされる。」（Burgin 1983: 235）言いかえれば、写真は社会秩序の中において、明記されているものであれ、隠されているものであれ、言語（書きことば）との関係において、「意味が見える」ものにするのであり、言語から独立に意味を創り出すのではない。このことは、ある種のソーシャルメディア——たとえばTwitterやFacebookにおける、同一の「投稿」として統一的に秩序づけられたテキストと写真との関係を考えるうえでも基本的な端緒のようにみえる。しかし、そこでの書きことばと写真の関係は、実際はどのようなものであるか。バーギンが述べたように、またミシェル・フーコーが「これはパイプではない」において「テキストはイメージを支える役割を果たす。テキストはイメージを名づけ、説明し、分解して、ひとつづきのテキストのなかに、書物のページのなかにそれを組み込む」（フーコー 1999: 22）と書いたように、さらに丹治恒次郎

(1975: 34) がフーコーのマグリット論から「テキストがイメージによって規制されるか、あるいはその逆」という定式化が導かれるとしたように、書きことばと写真のあいだにも階層的な従属関係を想定しうるのだろうか。後述するように、ソーシャルメディアにおける身体写真（画像）と書きことばは必ずしもこのように一意的な従属関係を構成せずに、社会的に流通してのではあるまいか。時として、フーコーが扱ったマグリットの「これはパイプではない」の絵のように。

ソーシャルメディアと写真の関係をどのようなものとしてとらえればいいのか。ベンヤミン(1936=1995)は、複製技術が有する大量生産性という性格が、作品（ここでは画像）からアウラを消滅させ、それが本来有していたくいま・ここ>的性格を失わせると同時に、それぞれの状況の中にある受け手に近づくことを可能にし、受け手のそれぞれの状況に基づく「アクチュアリティ」が作品に付与されると考えた。これに対し、佐野寛(2005: 118)は、インターネット上の「写真が直接感動を運ぶコミュニケーション」が人びとを引きこむ力は「写真を撮ること、それを見ること、そしてそれを見せることが、インターネットという優劣評価はもちろん動機の評価も目的の評価もしない自動システムの中でひとつになってしまうこととに関わっているのではないか」と述べた。明らかに、佐野の見方は、ベンヤミンの延長線上にある。ただベンヤミンの指摘は、ソーシャルメディアを通して「(アップされた) 写真を見る」側の多様性についてまでを(マス・メディア論の原型としての性格を維持しつつ)じゅうぶんに射程におさめるものとはなっていない。佐野は「写真を撮ること」「見ること」「見せること」「(「アップする」を含む)が、それ自体、動機、目的の評価をしな

い(かにみえる)システムの中で一体化していることを重視する。このような「自動システム」を介してベンヤミンが「複製技術」に対して有していたヴィジョンを超える、新たな実践が創りだされているという点を、佐野の「メディア写真論」は暗示し、そこにおいて、プリントされた伝統的な写真とともに、映像型のマス・メディアとも異なる、メディアと写真の新たな関係が示唆されている。

3 相互行為

(対面的)相互行為は、言語的なものと身体的なものからなっている。アーヴィング・ゴフマンは『行為と演技』の有名な書き出し、「ある個人が他の人前に出るとき、ふつう、その人たちは、その個人についての情報を得ようとするか、その人についてすでに知っている情報を活用しようとする」に続いて、このような情報は、多くの情報源からさまざまな「記号の乗り物」(sign-vehicle)を介して得られると書いている(Goffman 1959: 1)。ゴフマンは、あたりまえのこととしてことさらに言及していないが、私たちがこのような対面的相互行為において、相手に関する情報を得る、最も一般的な情報源は、相手が話すことばと、私たちの眼前に呈示される相手の身体であることは特に問題にする余地がない。ここで言う対面的相互行為の範囲をやや広くとるならば、相手が話すことばだけではなく、相手が書くことば(手紙、メモなど)を介して伝えられるメッセージも、言語的なものとして重要になる。

しかし、当然のことながら、相互行為において呈示される言語的なもの(表現)と身体的なもの(表現)のあいだには矛盾、ギャップが生じうる。この点を鋭く問題視したのがグレゴリー・ベイト

ソン (Bateson et al. 1956=2000) による「ダブル・バインド」の理論だと言えよう。精神分裂症（統合失調症）の患者が感じる、肩をだいたときの母親の身体のコわばりと、手を引っ込めた自分に向けられる「もうわたしのことが好きじゃないの？」という母のことばのあいだのギャップ。ベイトソンが挙げる例があまりに鮮烈なため、私たちはこれを統合失調症の病因の理解という「特殊な」文脈に限定したくなりがちになるが、実際は、このような言説的なものと身体的なもののギャップはより一般的な現象に他ならない。だとすると、矛盾しあい見緊張関係にあることばと身体のあいだのどこに「行為」は存立すると認められるのか。

しかし、(ゴフマンにしろ、ジョージ・ハーバート・ミードにしろ) 多くの相互行為論は、相互行為における言語的なものと身体的なものの矛盾に深く立ちいろうとしない。むしろ「言語的なもの」と「身体的なもの」は、相互行為論において分析単位である「行為」として一体的に把握されたうえで、「行為の意味」が主題化される傾向がある。

4 ソーシャルメディアを介した「相互」行為

このような「相互」行為がソーシャルメディアを介してのメッセージのやりとりとして行われる場合、「相互」行為の身体的なものは身体イメージ（画像、映像）によって代替される。

Facebookの場合、メッセージの送り手の身体に代替されるイメージは、一般的には、送り手自らがプロフィール写真として設定している写真であり、投稿の中で書きことばの上のスペースに常にアップされる自らの身体画像ということにな

る。陸みんき (2015: 145) は、このような「画像で作られ認識される身体」を現代社会における身体の一類型とみなし、「画像的身体」と呼んだ。陸の論議の妥当性が担保しうるか否かは、「身体とは何か」という本質的な問いの帰趨に関わる問題であり、安易な論断を許さない²。ただ本稿では、それらが、身体そのもの、ないしはその延長であるという点よりも、それらが相互行為の参加者によって、相互行為の場に非在である身体に代替しうるイメージであるという点をより重視したい。

ソーシャルメディアを介した「相互」行為においては、身体的なものが身体イメージによって代替されることで、対面的相互行為場面において存在したような言語的なものと身体的なもののギャップは、より複雑なかたちであられる。

第1に、言語的なものと身体的なもののあいだにではなく、ソーシャルメディア上に示される身体イメージと、それらのイメージが帰属される「相互」行為の参加者の現実の身体のあいだにギャップが存在する。この点に関して、ソーシャルメディアに先行するプリクラの時代から始まり、私たちにとって身近で、比較的わかりやすく定形化されたメッセージの例として「変顔」がある。例1の「みいたろ♡メンヘラ少女」（以下、「みいたろ」）がTwitterに投稿した写真には、二人の少女（おそらく）の「変顔」が写っている。また「みいたろ」はツイートの中で「れいかちゃん」に呼びかけている。そうすると、アップされた二人の身体（顔）が誰の顔であるかについては、①「みいたろ」本人と「れいかちゃん」、②「みいたろ」本人と他の人（「れいかちゃん」でない人）、③「れいかちゃん」

2 陸の「画像的身体」論の前提には、平山満紀 (2010: 216-233) の高度情報化にともなう「身体の外延と内包の変化」に関する論議があると推察されるが、陸 (2015) は平山の業績には直接的には言及していない。

と他の人（「みいたろ」本人でない人）、④「みいたろ」でも「れいかちん」でもないふたりの人という4通りの可能性が考えられる。しかし、通常のTwitter利用者の読みからすると、②と④ではない可能性が高いと言う³。「れいかちん今日もありがとう！」というツイートの下にアップされた顔写真には、呼びかけられている「れいかちん」自身の顔は、当然、含まれていなければならない。このツイートは、

例1 変顔

れいかちん今日もありがとう！バイトお疲れ様！

Retweet 1

「私はあなたに感謝しているから、撮ったあなたの顔写真をアップするよ♡」という儀礼なのだ。さらに、「みいたろ」が「メンヘラ」という「書かれた」自己のアイデンティティに忠実（！）で

あろうとすれば、①でもない。言いかえれば、「みいたろ」は、「変顔」として加工したものであっても、自らの顔写真をTwitterにアップすることをためらうかもしれない。したがって、この2人の写真は、③である可能性が高いという読みが、Twitter利用者たちの「自然な」読みとしてなされるようである。ただ、いずれにせよ、「れいかちん」本人が、自らの端末を介してアップされた写真をみた場合、「れいかちん」にとっては、この2人が誰かは自明だろう（そうでないと、「みいたろ」がこの写真をアップした意味がない。）ツイートに示された、このツイートの期待された受け手「れいかちん」は、写真に写っている人たちの「ふつうの」顔（身体）と、それに代替される「変顔」（身体イメージ）とのギャップを認識することができ、それによって写真の送り手である「みいたろ」が「れいかちん」に示そうとしている気持ち（「ありがとう！」）がよりストレートに伝わるだろう（ハートマークの効果だけではなく）という期待が、ソーシャルメディアを介した相互行為において共有されていることがわかる。

第2に、言語的なものと身体イメージのあいだに距離が生じる。これは3で対面的相互行為についてみた言語的なものと身体的なものとの距離と類似しているかに見えるが、身体（モノ）があくまで、イメージにとどまり、その実際の身体（モノ）との類似性を疑義にさらしうるソーシャルメディア上の文脈では、よりドラスティックなものとなりやすい。例2のような女性（おそらく）の自撮り（？）写真をアップしたツイートはその好例だろう。

3 この点を示唆してくれた小林将也と、小林の指摘を受けて例1のツイートを解釈してくれた小林 明治大学文学部心理社会学科現代社会学専攻、2016年度4年大畑ゼミのメンバーに謝意を表する。

例2 chisa「嘘です」

この前の自撮りアップしますね。(嘘です)

だが、「嘘です」と書かれた「嘘」とは何か。「嘘」なのは「嘘です」の前に書かれた「この前の自撮りアップしますね」であり、したがって、「嘘」なのは、下の写真なのか（言いかえれば、ツイートの下の写真は、（１）「chisa」本人のものではないのか、（２）本人の実際の身体とはかなり異なるような「加工」がされているのか、あるいは（３）「嘘」なのは「自撮り」の部分であって、この写真は「chisa」本人の実際の身体に近いものではあるが、「chisa」本人によって撮影されたものではないのか。）それとも、「嘘です」という書きことば自体が「嘘」なのか（言いかえれば、この写真は、実際に自撮り写真であって、本人の素顔に近いものである、つまり「嘘ではない」のか。）

この写真と「嘘です」という文字のソーシャルメディア上の併置は、そのような受け手（このツイートを見る者）の疑問を宙づりにし、「非決定」のままとする。その意味において、このツイートにおける言語的なものと身体イメージとの距離は、フーコーが論じたマグリットの「これはパイプではない」が提示している問題に接近しているといえよう。

5 「語る」主体／現前する(画面に現れる)主体

このような言語的なものと身体イメージの距離は、4の例2のように作り手によって戦略的に利用される。しかし、通常の多くの利用者は、ソーシャルメディアに書きことばや画像を投稿し、投稿されたそれらを見ていても、言語的なものと身体イメージのあいだの距離を、多くの場合あまり明確には意識しない。それはなぜだろうか。

（対面的）相互行為には、ある前提がある。それは、行為が主体—客体関係において成立するものではなく、ふたつ以上の主体どうし、典型的には「自己」と「他者」の関係として成り立つことである。

ソーシャルメディアを利用する人は、スマホ(PC)の画面を見つめている「自ら」をいちおう確かな実在として認めている。そのいっぽうで、ソーシャルメディア上に表示される（画面に現れる）身体イメージがある。そのような現前する(画面に現れる)主体と、あるメッセージを通じて「語る」主体の関係はどのようになっているのだろう。

例3と例4は、いずれも明治大学広告研究部のTwitter公式アカウントにあげられたツイートである。広告研究部は、大学祭期間中に行われる明治ガールズコレクションへの取り組みを主要な活動内容のひとつとしており、例3、例4は、いず

れもイベント前にイベントの出場者を紹介したツイートである。例3にみられるように、メディアミックスを通じて出場者を紹介するための戦略として、出場者である女性たちにブログを書いてもいい、Twitterを入り口に人びとを出場者のブログ（例3にリンクが示されているアメーバ

）へと誘導する方式をとっている。Twitterの画面においては、アカウントの表示名である「明治大学広告研究部」が最上部に表示され、その横に広告研究部のアイコンが示される⁴。その下に例3の場合、「ブログを更新しました「休日の過ごし方★Entry No.3木村愛」」が示される。冷静にみるならば、（この画面からはリンクにはいらないと読めない）ブログを書き、更新しているのは、写真でイメージが示される木村愛さん自身である（かもしれない）にせよ、このツイートにおいて「ブログを更新しました」と「語っている」のは、「広告研究部」（の広報担当者）であることはわかる。しかし、ツイートの下に示されるほほえんでいる木村さんの写真によって、「現前する」身体（画面に現れる身体）が、実際に書きことばを書き、配信している身体に代わり、Twitterにおいて「仮想的に語る」「主体」とされるのである。

例3 ブログを更新しました 「木村愛」



明治大学広告研究部

ブログを更新しました「休日の過ごし方★Entry No.3 木村愛」

また例4は、その直前に投稿されたツイートとの連関関係が想定されており、その意味は直前のツイートによって補完されない限り十全には解釈できない。これらの一連のツイートは、イベント情報が載っている広報誌Mstyleが出場者たちによって配布されていることを伝えている。ツイートは「(Mstyleを)まだ持っていない人はリバティータワーへ急げ〜!」と書き、身体イメージとしては、出場者、野崎瑞穂さんからMstyleを受け取っている男性（おそらく）が示されている。写真の二人の視線の方向や表情から、おそらく撮影のためにポーズをつけて撮られた写真であることが推定できる。「リバティータワーへ急げ〜!」は野崎さんに帰される「語り」としては異質であり、他の身体（イメージ）に帰されるべきものであろう。ここで、画像において、野崎さんからMstyleを受け取っている男性の身体が、モバイ

4 例3と例4は、いずれも2014年に投稿されたツイートである。明治大学広告研究部は、その後、アイコンを変更しているため、これらのツイートを、本稿執筆現在（2016年12月）Twitterで検索して表示したとしても、アイコンについては投稿当時と同じ状態では表示されない。

ルメディアであるスマホでこのツイートをみて、その場に向かおうとしている不特定多数の男性(?)の身体を、いわば「先取り」するものとはなっていないだろうか。Twitterの画像において、野崎さんからMstyleを受け取っている(べき)「自ら」の身体イメージを「先取り」したイメージということである。また同時に、ここで「語っている主体」は、リバティータワーの前で野崎さんからMstyleを受け取り、(Twitterを通じて)(他の学生に)「野崎さんに会えるように急げ〜!」と呼びかけている主体である。ソーシャルメディアの言語的なものと身体的なものの組み合わせは、このように(メディアを通じて)「仮想的に語る」主体を創りだす。ソーシャルメディアは、身体とは何かを問うように、「語る主体」とは何か、それは、メディアを介した相互行為の中で「創出される」ものではないかと問うのである。

例4 リバティタワーへ急げ〜!

明治大学広告研究部

【駿河台キャンパス】リバティタワー前でも、野崎瑞穂さんによる配布が行われています!本日が校内配布最終日ですのでまだ持っていない人はリバティタワーへ急げ〜!

6 「相互」行為を超えて——「公共圏の論理」と「非-公共圏の文脈」

ソーシャルメディアを介しての「相互」行為においては、対面的相互行為における身体的なものが身体イメージによって代替され、そのような代替と言語の関係を介して「仮想的に語る」主体が創りだされることを述べた。このことは、ソーシャルメディアを介しての「相互」行為が、対面的相互行為の基準にてらせば、はたして「社会的行為」と言えるのか、そもそも「行為」とは何かを問うものであった。しかし、別の点からすると、ソーシャルメディアを介しての行為は「相互」行為と言えるのか。たしかにSNS利用は、よく知り合っている者たちどうしのあいだで結ばれているか、ネット上での相互行為は、ある行為を発する身体とそれが向けられている「仮想的な受け手」から成っていると、いちおう考えられるが、メディアを介してメッセージを受けとることは、送り手が想定していなかった受け手にとっても可能である。

もちろんゴフマンが指摘しているように、対面的相互行為においても、自己が自らに関する情報

を操作すべく意識している「他者」以外の人に、行為が見られ、解釈され、社会的帰結をもたらすことは起こりうるし、またこれもゴフマンがすでに指摘しているように、私たちは公共的な場面において、相手に対しているときに、自分たちのそば、横にいる「他人」の目も意識している。

しかし、ソーシャルメディアは、現実の公共空間（広場、ショッピングモール、会場、街頭等）に集いうる人数の上限を超えて、インターネットに接続可能であればより一般的にアクセス可能である。にもかかわらず、現実の場面と異なり、ネット上における情報のやりとりを「行為」として規制する法整備にはまだなお進んでおらず、その分、ネットは特定のネット・コミュニティに固有の自主的な「ネチケット」「ルール」によって規制される傾向がある。

しかし、ソーシャルメディアによって形成されるサイバー空間に対し、私たちは矛盾した意識を持っている。ひとつには、ネット上を「現実の世界」と異なり、「自分が自分でいられる場所」「言いたいことが言える場所」としてとらえる傾向がある。たとえば、レニンガー（Renninnger, 2015）が指摘しているような「反公衆」（counterpublic）の文脈、公けの場では示せないような私的な好みや思いを自由に（場合によっては匿名で）表出できる場という考え方である。もうひとつは、ハーバーマス（Habermas 1990＝1994）の『公共性の構造転換』の論理をサイバー空間に適用する考え方がある。この考えに従えば、ネットはかつてコーヒーハウスやサロンが果たしたような世論形成機能を担う場であり、私的な感情や表現に対して「公共圏の論理」が優先される場である。このようなソーシャルメディアにおける「公共圏の論理」と「非-公共圏」のコンテンツ、

文脈の衝突の中に、ネット上の「相互」行為が「相互」行為ではなく「集合行動」——その劇的なケースがいわゆる「炎上」である——となっていく契機をみいだすことができる。

すなわち、私は、例1や例2のように自らのTwitterアカウントに、予想する「仮想的な受け手」（例1の「みいたろ」の場合であれば「れいかちゃん」）へ向けて（自撮り）画像やツイートを投稿することができる。ここで、私はレニンガーが言うような「反公衆」の文脈において、「プライベートな」「自己表現」を行っている。しかし、当然私は、（アカウントに鍵をかけない限り）「twitterに自分の本人写真を投稿することは不特定多数の人に写真を見られることになる」（陸2015: 146）ことを知っている。投稿された私の「プライベートな」「自己表現」は、私が想定しなかった「受け手」の「一般的な」「公共圏の論理」にてらして、批判、あるいは非難されることになるかもしれない（まさに「プライベートすぎる」という「論理」に基づいても）。

ゴフマンは、物理的公共空間における対面状況を念頭におき、「投錨された関係」（anchored relations）と「匿名的な関係」（anonymous relations）を区別した。ゴフマンによれば、「投錨された関係」とは、自らが「相手のことを個人的に知っており、しかも相手のほうも自分のことをそのように知っていると自分でわかっている」（Goffman 1971: 189）関係であり、これに対し「匿名的な関係」とは、「たとえば、道で偶然すれ違う二人の見知らぬ人のように、その場ですぐにわかる社会的アイデンティティに関してだけお互いを知っている」（Goffman 1971: 189）関係である。

ゴフマンは、対面的社会状況においては、投錨された関係と匿名的な関係という両極のあいだ

に、さまざまな中間的形態が存在することを指摘するのを忘れない (Goffman 1971: 190)。しかし、ソーシャルメディアを介しての社会関係は、投錨された関係と匿名的な関係の新たな中間的形態の一種と言うよりも、そこにおいては、投錨された関係と匿名的な関係という二分法が無効化することを示すもののようにみえる。たとえば、「リアルな」関係はひとまず考えないこととして)、Twitterでお互いのアカウントをフォローしあい、お互いのツイートを見あっている、いっけん、投錨された関係に見えるものが、そこで交換されている自己と他者に関する情報は、現実の自己と他者に対応しないものである可能性、つまり、実質的には匿名的な関係である場合がある。逆に、Twitterで一方向的にフォローされ、相手のほうは(ほとんど)ツイートしないので、相手がどのような人かわからない、つまり(少なくとも一方向においては)「匿名的な関係」であると思っていたとしても、実は、そのアカウントの所有者が、「リアルな」関係においては、よく知っている相手、つまり、投錨された関係を有している相手であるかもしれない。

ゴフマンはここで「関係」という用語法で論じているが、このことはソーシャルメディアにおける行為が投錨的なもの(ゴフマン (Goffman 1971) の用語を借りれば「結びつきの記号」(tie-signs)を提示するもの)であったとしても、実は匿名的な文脈において行われている可能性(逆に、匿名性を意識して行われた行為であっても、相手側に投錨的に解釈される可能性)を常に意味する。対面的相互行為カテゴリーの二分法が成立しない状況を前提としつつ、ソーシャルメディアの利用者は、それを通じて自らを呈示し、メッセージを発しつづけるのである。

7 おわりに

「はじめに」で高度情報化による社会学の基本概念群の再審の必要性を述べた。最後に、その必要性への気づきは、筆者の場合、「研究の場」での社会理論の探究からというよりも、日常のゼミでの学生たちとのやりとりから生まれた部分が大いことを告白しておく。

基礎ゼミで学生たちが「私たちはなぜSNS(ソーシャルメディア)をやるのか」討論する。その討論を聴きながら、その「なぜ」に適切に答えるためには、まず「私たち(人びと)はソーシャルメディアで何をやっている(と言える)のか」をはっきりさせる必要がある、「なぜ」の前に(そちらは当然わかっていると思っている)「何を」のほうだと学生たちに伝えたくて、うまく伝えられない。本稿が言いたいのは、『『ソーシャルメディアで何を』を書き(言い)あらわそうとした場合、私には、社会学的な道具立てを使ってそうするしかない。しかし、そうしようとする、うまくできない。したがって、私には、私たちはソーシャルメディアで何をしているかはまだわからないが、少なくとも、今までの社会学の考え方では、それはわからないようだということは想像がつく』ということである。

「はじめに」で引いた「社会的相互行為」の規定、「社会的な場で複数の主体が影響をおよぼし合い、それによって互いの関係を変容させていく過程」(宮島編2003: 419)に、ソーシャルメディア上のやりとりはいっけんあてはまるようである。しかし、この規定を次のような(同じく一般的な)「相互行為」の規定に代えるとどうだろうか。「相互行為は、二者がそれ以上の参加者が、お互いを認知できる範囲内において、行為と活動を通じてお互いに向きあう場合に生じる。」(vom Lehn 2007:

2361.傍点は引用者) ソーシャルメディア上のやりとりが参加者が「お互いを認知できる範囲内」で行われていると言えるかは、まさに「ビミョー」であり、ソーシャルメディア上のやりとりは、このような意味における「相互行為」と言えるかあやうい限界的な事例だと言える。だからこそ、上記の規定の筆者は、社会学における相互行為概念の概観を「しかし、情報・コンピューター科学で用いられる『相互行為』概念と、社会学において発展させられてきたそれとのあいだには、明白な緊張がみられる。前者が『送り手』と『受け手』の分離に基づいているのに対し、後者は、相互行為とされてきたものに特有の社会的特徴を護持しつつけようとしているからである。社会学が、現在、進んでいる技術革命の中で現れつつある相互行為の新たなかたちを把握する理論と方法を発展させることができるかは、今後明らかになるだろう」(vom Lehn 2007: 2364)と書くことで結んでいるのであろう。本稿もまた、このような問題意識を共有するものである。

本稿の論旨をまとめる。(宮島編 (2003: 419) に典型的にみられるように) 社会学における相互行為の伝統的規定は、「相互性の前提」と「行為(性)の前提」から成っている。「相互性の前提」とは、相互行為において認知しあっている「お互い」が確定できることであり、ゴフマンによる「投錨された関係」と「匿名的な関係」の二分法に典型的にみられるように「互いの関係」のありかたを特定、明細化できることである。「行為(性)の前提」とは「(複数の) 主体」が、特定の行為に先行して存在し、それらが行為を行うという、主体と行為の関係に関する前提を指す。従来、社会学的行為論においては「行為をする主体を行為者(actor)という」(安田 1980: 8) というように、哲学的

行為論においても「すべての行為は誰かによって、つまりいずれかの主体によって遂行されるものである、という考え(もしくは信念)」を出発点としつつ、「行為と結びつきつつ、或る意味で行為を超越する主体の理解」(稲垣 1983: 2, 9) へ進もうとする論議の流れにみられるように、これは自明の前提とされてきた。

ソーシャルメディアを介しての相互行為では、対面的相互行為における「身体的なもの」は「身体イメージ」によって代置される。この代置によって、送り手の現実の身体とメディア上の身体イメージ、また、相互行為における「言語的なもの」(本稿が分析対象とした限りのソーシャルメディアにおいては、書かれたことば)と身体イメージのあいだにギャップが生じる。しかし、そのギャップは、ソーシャルメディアの利用者のあいだでははっきりと気づかれることもなく、(通常の場合)問題になることもない。このギャップを埋めるのが、ソーシャルメディアという制度を通じて生成される「現前する(画面に現れる)主体」と「語る主体」である。これらの行為によって生成する主体は「主体(subject)」として名指しするよりも、「代理、作用(agency)」として名指しするのがより適切かもしれない。このように、ソーシャルメディアを介しての相互行為には「行為(性)の前提」が該当せず、伝統的な社会学的相互行為の概念では、それらを「行為」としてとらえ分析するのは難しい。

またソーシャルメディアは6で述べたインターネットのネットワーク性により、対面的状況を越えて(「いつでも、どこでも」)相互行為を維持する。そして、まさにそのことによって、ソーシャルメディアは、相互行為を想定された「お互い」の文脈から切り離す。このように、ソーシャルメ

ディアを介しての相互行為には「相互性の前提」が必ずしも該当せず（誤解が生じる余地はないと思うが、これは「ソーシャルメディアを介しての相互行為は双方向的ではなく一方向的である」というような（常識的に考えておかしい）意味ではない）、伝統的な社会学的相互行為の概念では、その「相互性」のあり方をとらえ分析するのは難しい。行為の相互性の文脈からの切り離しにおいて、呈示された身体イメージ（と書きことばの関係）が持つ意味のいっそうの考察は記して今後の課題としたい。

本稿の理論的含意と記しておくべき留保は、本稿が直接的に多くを負っている先行研究との関連においては、単純である。平山満紀（2010）や陸（2015）は、インターネット（ソーシャルメディア）上の表現の意味の究明は「身体とは何か」という問いを新たなかたちで提起するものであることを示唆した。筆者が、それに付け加えて述べたいのは、ソーシャルメディアを介してやりとりされる身体イメージは、同時に「行為とは何か」「主体とは何か」というまた別の根源的な問いに私たちを引き戻すものではないかということである。もちろん、このことは内藤朝雄（2016）が批判しているような、インターネットは（単独で）人間の存在様式や生活世界をすっかり変えてしまうかのように煽る「俗流ヴァーチャル論」に与そうということではない。重要なのは、内藤（2016）が追求しているような社会空間とインターネットの関連性、よりストレートな表現を引けば「インターネットと社会の関係」（内藤 2016: 211）であることは言うまでもない。それはまた、陸（2015）が着目したネット上の「自己（身体）」を、「社会」との、どうあがいても「なくなる」（陸 2015: 155）ことはない他者との関係において位置づけ

ていくという、いやになるほど基本的でかつたらい、ミード（Mead 1934）以来の作業の継続を意味する。高度情報化に際して「相互行為」概念は再審を迫られている。しかし、情報環境の変化の中で、相互行為論のプロジェクト自体は、おそらくまだ入り口にしか達していない。

文献

- Bateson, Gregory, Don D. Jackson, Jay Haley, and John Weakland, 1956, "Toward a Theory of Schizophrenia," *Behavioral Science*, 1: 251-264. (=2000, 佐藤良明訳「精神分裂症の理論化に向けて」『精神の生態学 改訂第2版』新思索社, 288-319.)
- Benjamin, Walter, 1931, "Kleine Geschichte der Photographie", (=1995, 久保哲司訳「写真小史」『ベンヤミン・コレクション1』ちくま学芸文庫, 551-581.)
- , 1936, "Das Kunstwerk in Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit", (=1995, 久保哲司訳「複製技術時代の芸術作品」『ベンヤミン・コレクション1』ちくま学芸文庫, 583-640.)
- Burgin, Victor, 1983, "Seeing Sense", Howard Davis and Paul Walton, eds., *Language, Image, Media*, Basil Blackwell, 226-244, (=1994, 室井尚・酒井信雄訳「意味を見ること」『現代美術の迷路』勁草書房, 75-103.)
- フーコー, ミシェル（岩佐鉄男訳）, 1999, 「これはパイプではない」蓮見重彦・渡辺守章監修『ミシェル・フーコー思考集成Ⅲ 歴史学/系譜学/考古学』筑摩書房, 17-37.
- Goffman, Erving, 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life*, Anchor Books.
- , 1971, *Relations in Public: Microstudies of the*

- Public Order*, Basic Books.
- Habermas, Jürgen, 1990, *Strukturwandel der Öffentlichkeit: Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft*, Suhrkamp. (= 1994, 細谷貞雄・山田正行訳『[第2版] 公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』未来社.)
- 平山満紀, 2010, 『母性社会の行方』紀伊國屋書店.
- 稲垣良典, 1983, 「行為の主体について」九州大学哲学研究室編『行為の構造』勁草書房, 2-24.
- 岩井弘融, 1972, 『社会学原論』弘文堂.
- 倉石信乃, 2004, 「写真の現在——1980-20世紀末」飯沢耕太郎監修『[カラー版] 世界写真史』美術出版社, 117-150.
- Mead, George Herbert, 1934, *Mind, Self, and Society: From the Standpoint of a Social Behaviorist*, The University of Chicago Press.
- 宮島喬編, 2003, 『岩波小辞典 社会学』岩波書店.
- 内藤朝雄, 2016, 「インターネットを用いたいじめや迫害をめぐる諸問題——「延長された表現形」として増幅させるブースター効果」加納寛子編『ネットいじめの構造と対処・予防』金子書房, 174-212.
- Renninger, Bryce J., 2015, "'Where I Can Be Myself'...Where I Can Speak My Mind": Networked Counterpublics in a Polymedia Environment", *New Media and Society*, 17 (9): 1513-1529.
- 陸みんき, 2015, 「「画像的身体」の現代日本社会における意味づけ——Twitterユーザーに見られる自発的身体呈示の分析を通して」『明治大学心理社会学研究』11: 141-157.
- 佐野寛, 2005, 『メディア写真論』パロル舎.
- 丹治恆次郎, 1975, 「ミシェル・フーコーと現代芸術——フーコーのマグリット論」『Ceci n'est pas une pipe』をよんで』(関西学院大学) 外国語・外国文化研究』2: 17-53.
- 近森高明, 2011, 「解説 常識が二度揺さぶられる不思議なテキスト」作田啓一・井上俊編『命題コレクション 社会学』ちくま学芸文庫, 427-432.
- vom Lehn, Dirk, 2007, "Interaction", George Ritzer, ed., *The Blackwell Encyclopedia of Sociology*, vol.5, Blackwell, 2361-2366.
- 安田三郎, 1980, 「行為の構造」安田他編『基礎社会学第I巻 社会的行為』東洋経済新報社, 2-28.

Body Image, Interaction, and Social Media

Hiroshi OHATA

ABSTRACT

The purpose of this paper is to reconsider the relationship between interaction and subject by focusing on the image (the portraits), especially the body image on social media. Starting from the discrepancy between languageness and bodiness in interaction, the author points that body image substitutes for bodiness in “inter” action via social media, and examines its implication. Social media makes the “talking” subject and the “presenting” subject in order to take for granted the distance between languageness and body image on it. It also locates “inter” action in the different phases which can be called “the logic of public sphere” and “the context of non-public sphere”. The traditional “interaction” concept cannot fully explore “inter” action via social media. It is because the traditional concept consists of the “presupposition of inter-ness” and the “presupposition of action-ness”, and the “inter” action via social media is not fit well with the both presuppositions. Thus, the innovation of interaction theory is an unavoidable task in facing with the higher information society.

Keywords: Body Image, Interaction, Social Media